



TITLE:

計画2-1 兵庫県におけるニホンザル 生息許容量の推定(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

三谷, 雅純; 池口, 仁; 清水, 聡; 武田, 庄平

CITATION:

三谷, 雅純 ...[et al]. 計画2-1 兵庫県におけるニホンザル生息許容量の推定(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1996, 26: 73-73

ISSUE DATE:

1996-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164844>

RIGHT:

計画 1-5

ニホンザルのセンサス法「ブロック分割定点調査法」の開発

大井徹（森林総研・東北），岡野美佐夫，白井啓，千々岩哲，春田亜紀（WMO）

鹿児島県屋久島西部の通称半山地域に生息するニホンザルの群れを対象に調査を行った。1)サル 음성種 (Itani, 1983) 毎に距離と発見効率の関係についての経験式を得ること，2)サルの日周活動性と各種音声の発生頻度の関係について検討すること，3)ブロック分割定点調査法（大井ほか，1994）での位置推定の精度を検討することを目的とした。ブロック分割定点調査法と群れの直接追跡を同時に行い，それぞれで得られた群れの定位情報と音声情報を比較した。群れの追跡者は，2群の追跡を延べ81時間6分を行い，15分毎に群れの位置を地図上に記録した。さらに，追跡中の群れ個体が発生した音声をアドリブで記録するとともに，スキャンニング法により15分毎の個体の活動性を記録した。定点観測者は，延べ200時間26分の定点観測を行い，聞き取った音声の種類，時刻，音源の推定位置などを記録した。定点観測者は群れの発見情報をトランシーバで連絡し合ったが，追跡者は定点調査者から情報を一方的に得た。また，別のデータセットとして，追跡者は，個体がラウドコールを発したときに定点観測者に連絡し，その音声を聞き取ったか確かめた。定点観測者は，平均4.1バウト/時間，群れ追跡者は，平均45バウト/時間の音声を聞き取った。このようにそれぞれの方法で観測された音声は頻度が異なるとともに，それぞれの音声種の割合も異なった。この違いは，観測者と音源間の距離の違いによるものと主に考えられるが，詳細は分析中である。

計画 2-1

兵庫県におけるニホンザル生息許容量の推定，三谷雅純（人と自然博・生態），池口仁（人と自然博・環境計画），清水聡（福井県立大・看護），武田庄平（東京農工大・一般教育）

兵庫県域のニホンザルの生息状況を現地調査によって調べ，ニホンザル個体群の生息を決める環境要因を抽出した。あわせて非集計確率モデルの1つであるロジットモデル（池口と武内，1993）を用いて兵庫県域の潜在自然植生を復元することで，ニホンザル個体群の生息に適した場所の潜在分布を推定した。現在の兵庫県地域において，ニホンザル繁殖個体群は冷温帯下部に人間活動を避けて生息し，その生息を支える基本的な植生タイプはクリ・ミズナラ林とアベマキ・コナラ林である。そしてその生息域は，比較的狭い範囲に分布している。このようなニホンザル繁殖個体群も，潜在自然植生下では，兵庫県地域に広く広がる常緑広葉樹林に広く低密度に生息するものと推定された。ただし，植生の好適性の判断には，現在の近畿地方に見られる植生の植物社会学的データを用いたため，この判断の時点で植生に及ぼした人為的影響を除去することはできなかった。しかしながら，この2つの分布の比較は，現実の歴史において，人為的な植生の改変がニホンザル繁殖個体群の分布を広くて低密度の分布から狭くて高密度の分布に改変した過程が存在したことを示唆する。